

特集

イギリスの挿絵文化



Flirting.『妖精の国で』
リチャード・ドイル (1870年) より

CONTENTS

- 特集 「イギリスの挿絵文化」 富山 太佳夫 (青山学院大学教授、本学法学部兼任講師)
- 「好奇心と微笑みと — 嶺 卓二先生」 富山 太佳夫 (青山学院大学教授、本学法学部兼任講師)
- 図書館長再任にあたって ～3期目を迎えた見市館長へのインタビュー～
- 図書館さんぽ 第11回 大宅壮一文庫
- 新収資料紹介 中央大学教職員著作目録・資料目録 (2012.6～2012.11 収集分)

特集

イギリスの挿絵文化

富山 太佳夫 (青山学院大学教授、本学法学部兼任講師)

諷刺漫画(カリカチュア)と言ってもすぐにはピンと来ないかもしれないが、要するに、ヒトやモノや政治的な出来事などを茶化しておちよくるマンガ的な絵のこと。それが18世紀から19世紀にかけてのイギリスの文化の中で大きな役割を果たしたのである——そう、一般的には、啓蒙主義と産業革命の時代とされる中で。スペインの有名な画家ゴヤの活躍した時代のイギリスでの話であるとする、いよいよ信じられなくなるかもしれないが、事実は事実であるし、風

景画家ターナーの活躍した時代でもあった。そのような時代に諷刺画と挿絵が文化のさまざまな面を描き残して、結果的には歴史の貴重な証人になったということである。

具体例をひとつ取り上げてみることにしよう。『首都のぼやき、ロンドンとその近郊のささやかなる害毒を真面目に、かつコミカルに眺める』というタイトルの、1812年に刊行された一種のガイドブックの表紙頁の横につけられた諷刺絵を見てみることにしよう。



『首都のぼやき、ロンドンとその近郊のささやかなる害毒を真面目に、かつコミカルに眺める』

Metropolitan grievances, or, A serio-comic glance at minor mischiefs in London and its vicinity by George Cruikshank. 1812

まず第一印象は雑然としていて、品が無いなあということだし、このひとつの画面の中に幾つもの話が交錯しているようでもある。前景にあるのはロンドンの石畳の道。その真ん中に立っている男は何かパンフレットのようなものを(正確には、ブロードサイドを)売っているようだが、裸足であ

る。その左側には、手押し車を押しながら、犬を怒鳴りつけているオバちゃん。中央の黒い少年は煙突掃除だろうが、顔の色の対照的なその右側の子どもは輪回しをして遊んでいる——その階級差は歴然としている。右端のお婆さんと左端の女性、そして驚いて片足をあげている男の階級もや

はり少しましな方だろう。右上の窓から水を捨てている女性は勿論家政婦（夜間だと排泄物の混じっていることもある）ではあるが、なんと汚れた水を食べ物屋の上に堂々と捨てている。そのようなロンドンの日常の姿がこの諷刺絵の中には品無く描き込まれていて、苦笑を誘うのである。その細部はたとえ歴史的な事実に正確には対応していないにしても、その姿を生々しく伝えてくれるのではないだろうか。

しかし、そうだとすると、興味深い問題が浮上してくる。左上の窓からも女性が水をこぼしているが、その水の先には10枚のポスターが並んでいる——つまり、そこはロンドン市内に既にいくつもあった版画店であるということだ。しかし、左上の一枚には巨大な尻をした黒人の女性が描かれているように見える。これは「ホットントットのヴィーナス」と呼ばれた実在の女性の、ロンドンでも大評判になった女性の諷刺絵なのである。大西洋とカリブ海に焦点を絞る黒人奴隷史の中では取り上げられることのなかった人物の姿がここに残されているということである。品の無い変形や歪曲を生命線とするカリカチュアではあるが、こんなかたちで歴史学に貢献することもあるということだろうか。

*

それにしてもこのカリカチュアなるものは何時頃からイギリスで楽しまれるようになったのだろうか。『オックスフォード英語辞典』で調べてみると、この語の用例の殆どが18～19世紀のものであることが分かる。そしてそうした用例のひとつが『文学と美術におけるカリカチュアとグロテスクの歴史』という1865年刊の本なのである。

トマス・ライトの手になるこの大部の本はイギリスにおける諷刺文学と芸術の歴史を説明してみせるものであるが、「この語は前世紀の終わりになるまで、英語のカリカチュアという意味で我々の言語の中に定着することはなかった」という指摘が含まれている。その定着化のプロセスにおいてウィリアム・ホガースが果たした役割を高く評価するのは当然のことであるが、ライトは次のようにも指摘している。「ジョージI世とII世の時代の政治的混乱の中で成長したカリカチュア派は、同じ分野でより大きな機能をもつ人物を何人も生み出し、その彼らがジョージIII世の時代にそれを頂点まで押し上げた。その中にはギルレイ、ローランドソン、クルックシャンクという偉大なる三人の名前が含まれている」。イギリスにおけるカリカチュアの定着の背景に18世紀から19

世紀の所謂ジョージ王朝期の政治的な混乱があり、それが諷刺の対象を提供したのだという指摘は適格であるだろう。確かに国王や貴族や政治家、上流の女性たちを対象とした諷刺画で最もすぐれたものはこの時期に描かれているのである。勿論、対象とされるものの幅もぐんと広がった（因みに、先ほどの『首都のぼやき』はジョージ・クルックシャンクの作である）。

そして興味深いのは、このような諷刺の対象の拡がりに呼応するかのように、それを表象するための技法にも従来はあまり目立たなかった新しいものが登場し始めたということである。そのひとつが極度の肥満を使うという技法——



【双子座、カストールとポリュデウケース、新しいパルテノン第5番】

The Twin Stars, Castor and Pollux. New Pantheon No. 5 by James Gillray. 1799

それを使って見事な作品を1790年代に残したヘンリー・ニュートンは若くして世を去ってしまったが。その彼の手になる諷刺画の一枚の中にも黒人の姿があるし、黒人の女のもっとあられもない臀部を描いたものもある。この時期のロンドンにはすでに一万人前後の黒人の姿があったとされているが、さまざまな諷刺画もまたその存在を市民に知らせる働きをしたのではないかと思われるのだ。

*



David Alexander, Richard Newton and English caricature in the 1790s (The Whitworth Art Gallery, The University of Manchester, 1998), 図 58

問題は、抜群の能力をもつ諷刺画家たちの手によって頂点に昇りつめたあと、イギリスのカリカチュアはどうなってしまったのかということである。勿論ヴィクトリア女王の周辺の人々やユダヤ人宰相ディズレーリがその材料を提供してくれるのだが、或る意味ではそうした人々のもつ可能性は既に利用されつくしていた。勿論、諷刺画が滅亡してしまうわけではないけれども、生きのびるためには新しい活路を見出すことが必要だったはずである。ライトの前記の本は実はこの問題に向い合うことをせず、ギルレイ、ローランドソン、クルックシャンクの名前で閉幕としていたのである。

この疑問に答えるための手掛りとなるのは、既に超肥満体（つまり超デブ）の表象を活用して政治や上流社会の諷刺画を生み出していたジョージ・クルックシャンク（1792～1878年）であるだろう。『オックスフォード英国人名辞典』が、「ギルレイ以降では最も豊かで、オリジナルで、巧みな諷刺画家」と評している人物である。その彼がディケンズの『ボズのスケッチ集』（1836年）というロンドン風物誌の挿絵を担当したのだ。小説『オリヴァー・トウィスト』の挿絵も。いや、それ以前にピアス・イーガンの『ロンドンの生活』（1820～21年）の挿絵も。つまり、諷刺画として一枚ずつ独立していたものが、挿絵として単行本の中に組み込まれていったということである。18世紀の後半にはまだ表紙頁の前後に一枚だけ組み込まれることの多かった挿絵が、本文中のあちこちに配置されて読者を楽しませることになったのだ。ときには挿絵の方がより強いインパクトを残すこともあり得る——『不思議の国のアリス』を思い出してみよう。思い出せるのは挿絵の方であって、文章の方ではないのが普通であろう。

そして、挿絵なるものの存在に眼が向けば、そのあとの展開を考え、資料的にあとづけることはむずかしくはない。19世紀におけるイギリスの経済的拡大（大英帝国の巨大化）、人口の増大（読者の増加）、新聞や雑誌などの定期刊行物の増加という歴史環境の変化はカリカチュアや挿絵のあり方にも大きな影響を与えたはずである。『グレート・ブリテンとアイルランドにおける19世紀ジャーナリズム辞典』（2009年）は1,620点の新聞や定期刊行物について説明しているが、この数は全体の37%でしかないという。そして、次のように説明する。「定期刊行物はこの世紀の学問、社会、政治の言説の多くを促進するのに重要な役割を果たした。作家をく生み出す>本を定期的に連載し、言葉と絵図によって知識を広め、ニュースを作り、調べ、広く報告したし、広告を載せて、不可欠の経済的な役割を演じた。勿論、楽しませることもした。小説や漫画、コンテストやパズル、諷刺を使って」。ここまで来れば、もう今の時代と大差ないということになるであろうし、現にそうであったのだ。

現にクルックシャンクもディケンズも定期刊行物の出版にも関わっていた。彼らの時代には『挿絵入りロンドン・ニュース』（1842～1989年）や、『挿絵入り警察ニュース』（1864～1938年）が刊行されていたし、そう、『パンチ』（1841～2002年、但し、途中で休刊あり）もあったのだ。この超有名な週刊誌を模倣した『ファン』（1861～1901年）もあったのだ。因みに、最後の二つの漫画雑誌はほぼ全部中央大学図書館に揃っている。

めくってみるといい。そこに収録されているカリカチュアや挿絵に仰天して、間違いなく絶句してしまうことになるだろう。1849年の『パンチ』にはロンドンのさまざまな情景を41回にわたって連載したリチャード・ドイルの挿絵がある（彼の甥にあたるコナン・ドイルの書いたシャーロック・ホームズ物語を連載した『ストランド・マガジン』（1891～1950年）も、勿論この図書館にある）。『不思議の国のアリス』の挿絵を描いたジョン・テニエルは、何十年も『パンチ』に挿絵を描き続けた。彼は、アイルランドの労働者をゴリラやフランケンシュタインの怪物になぞらえたりした挿絵をかく。そしてリカ・ジョコ——彼は日本人のさまざまな姿を描き込みながら、イギリスの政治状況を茶化してみせた。

説明し出したら本当にきりのないことになってしまうのだが、図書館とは本来そういう宝物の集合場所だということである。

中央大学図書館では、この記事と連動して
『第19回中央大学図書館企画展示：笑っちゃう…的？——イギリス諷刺絵の歴史』と題する催しを
 次の要領で開催いたしますので、この機会にぜひご覧下さい。

- ◆期間：2013年4月1日（月）～5月11日（土）
- ◆場所：中央図書館 2階展示コーナー

好奇心と微笑みと —嶺卓二先生

富山 太佳夫(青山学院大学教授、本学法学部兼任講師)

今から50年程(正確には47年)前の話になるけれども、鳥取県の西部の農村から東京の大学に出て来た私には、何の夢もなかった。ただ、大学を出ていれば、いずれ田舎に戻って中学か高校の先生になれるかもしれない、役場で働けるかもしれないくらいのことを考えていただけである。我が家の百姓仕事をついででもよかった。そして、時間があれば本を読む——それで充分であった。

それなのに東京に出て来て、東大の文Ⅲに入学してしまうことになったのは、高校のときの成績がいいからというだけの理由で周囲が作り上げてしまった雰囲気^{しゅうまい}のせいであったように思う。ともかく入学したことはしたものの、まわりじゅうが何だか頭の良さそうな顔をしていて、私としては嫌でたまらなかった。あれこれの講義も、語学の授業もつまらなくて、私は大抵の時間を図書館ですぐすことになってしまった(英語の授業は初めの数回出席して先生の顔と性格を確認し、あとは試験のときに出かけるだけ。それでも当時は怒られることはなかった)。

勿論、例外もあった。そのひとつが朱牟田夏雄^{しゅうむた}先生の授業で、テキストはアイリス・マードックという女性作家の『イタリアの少女』という小説。英語の受験参考書も書いておられた方なので多少甘く見て出席した私は、仰天してしまった。毎回先生が英文を読んで、訳して、語学的な説明をして下さる。その見事さは他の教師とは桁違いであった——この授業だけは、私は毎回徹底的に予習して出かけた。今になって、この話を友人や他の先生たちにすると、例外なしに羨ましそうな表情が浮かぶのも或る意味ではもっともなことで、朱牟田先生は日本で最も英語がよく読める学者という評判のある方だったのだ(18世紀イギリスの超難解な小説『トリストラム・シャンディ』の翻訳(岩波文庫)をされた先生は、中央大学文学部でも10年間教鞭をとられた)。

もうひとつの例外が、朱牟田先生と同世代の嶺卓二先生の授業。そのテキストは20世紀のアメリカの小説家トマス・ウルフの短編だった。この授業をうける前に、私は先生の注釈本を使って『ハムレット』を読んでいて——日本で最高のシェイクスピアの注釈者が、現代アメリカの小説を？

嶺先生のおだやかな、小さな声。私は前から二列目に座って、そのおだやかな、やさしい声を聞きながら、その好奇心のあまりにも大きな、そして自由な拡がり^{ひろがり}に唖然としていた。

文学部の英文科と大学院の学生であった時期には嶺先生の授業に出る機会にはめぐまられなかった。ところが、英文科の助手になったときに、嶺先生の大学院の演習が開講されたのだ。勿論、助手という立場上、その授業に出たりしてはいけないのだが、それはあくまでも建前上のことであった。嶺先生の声を聞きたくてしかたのない私は、このときも出た。他の院生たちも文句を言ったりはしなかった。そのテキストは『センチメンタルな旅』——そう、『トリストラム・シャンディ』と同じ作者ロレンス・スターンの作品である。こんなことがあっていいのだろうか？ 朱牟田夏雄と嶺卓二、英文学の難解な作品を正確に読みこなす力を体現したこの二人の先生に私は教えを受けたのだ。65歳になった今、私は胸をはってそのことを自慢できる。

実は、大学院のこの演習のさなかに面白い珍事が起きてしまった。或る個所まで来たところで、ここは文法上の説明がむずかしいと嶺先生がおっしゃって、あれこれの解釈の可能性を示され始めたのだ。確かにどの可能性もありえた。すると、しばらく時間をかけたところで、英語学を専攻する院生が、「先生、これ、単純な分詞構文じゃないですか」というトンデモない発言をしてしまったのだ。何ということをおもっていると、先生は、「あッ、そう、そう」とおっしゃって、ニッコリされた。そのときの院生たちの安堵の表情、そして何よりも先生の微笑み——あれは決して忘れることができない。

新宿の洋書店の本棚の前でも何度か先生にお目にかかったことがある。そのときの質問は、「これの、分かり易い入門書、どれですか」というもの。「これ」とは最先端の批評理論のこと。嶺先生はこんな分野にも眼を向けておられたのだ、あのおだやかな好奇の微笑みを浮かべて。

図書館長再任にあたって

～3期目を迎えた見市館長へのインタビュー～

図書館長に再任された見市雅俊教授に、学生時代の思い出や図書館に関する考え方について語っていただきました。



見市 雅俊 館長

学習の中心に図書館を

学生が充実した4年間を過ごすために、学習の中心に図書館はありうるし、またそうあるべきです。それを実現するために、4年間、館長の仕事を務めてきました。そして自分の考える理想の図書館にはまだほど遠いと感じていたところに、次期館長のお話をいただきましたので、3期目でそれを実現すべく喜んでお引き受けしました。

学生時代の読書経験

夏目漱石や芥川龍之介、ドストエフスキーなどの小説を読んできました。さらにマルクスやウェーバー、トロツキーなども読んでおりました。しかし、これは少なくともあるレベル以上の大学の学生一般について、大なり小なり、言えることだったはずです。

私は1965年に大学に入りましたが、ほとんど図書館は利用しませんでした。というのも、当時の大学の図書館は一般に施設が今日ほど充実しておらず、少なくとも私にとっては、とても陰気な場所でした。

必要な資料は自分で買うことが多かったです。当時は古本屋さんもちろちらにありました。今はもうほとんどありませんが、私が育った世田谷の三軒茶屋だけで、たしか5、6軒はあったと記憶しています。

カード目録とノートテイク

～情報リテラシー能力を身につける場としての図書館～

図書館を全く利用しなかったわけではありません。私の研究分野は16～17世紀のイギリス史ですので、洋書を読む機会が多くありました。洋書は当時とても高価だったので、図書館の資料を活用していました。

図書館の資料を貸出して利用する際、コピーをとることはほとんどありませんでした。コピー機が全くなかったわけではありませんが、使い勝手が悪く、私はほとんど使っていません。ですので、貸出した資料の内容をノートに取りながら、読んでいました。もちろん、全文を書き写すということではなく、重要な部分をまとめるということです。

近年、資料を読みこなし、情報をまとめるためのHow to本も多く出版され、そのような能力の重要性が謳われていますが、今と昔の大きな違いは、昔は学習環境の問題で、その能力が自然に身についたことだと思います。

「昔の人がえらい」と言いたいわけではありません。しかし、今の環境で学習する学生の皆さんの場合には、意識してその能力を養う必要があります。

情報を整理しながら本を読むには、一語一語をきちんと理解し、どこが重要か検討しながら本を読む必要があります。

わからない言葉があれば辞書をひく、また関連する他の文献を参照する必要もあります。「精読」ということですが、そうすることで「知的耐久力」も身につくのだと思います。

先ほどお話したとおり、学習環境が学生に与える影響は大きいということを強く実感しています。学習環境の変化という点で、今の学生は本や電子媒体、インターネットなど様々な情報に囲まれています。

たしかに、多様な手段を利用することで、以前より効率的に情報を収集することができるようになったとは思いますが。例えば、図書館で本を探すとき、昔は「カードケース」の「カード目録」なるものを一枚一枚めくって所在を確認していましたが、今はOPACを使えば簡単に検索をすることができます。しかし検索した結果、大量の情報がでてきたときに、どのように処理すればよいのか。それが問題になります。一人の人間の頭で処理できる情報量は限界があります。今の学生にとっては、多くの情報の中から信頼性が高い自分の求める情報を取捨選択していく能力が必要になるはずだと思います。

資料を収集し、取捨選択するためには、パソコンによる様々なデータベースの使い方を学び、情報を収集することが必要だと思います。しかし、実際の学習においては、それだけでなく、収集した情報を整理・分析・表現・発表することが必要です。本当は、それらをまとめて、「情報リテラシー能力」というべきなのです。



(写真：中央大学大学史編纂課所蔵資料)

右：カード目録

左：カードケース（1980年代の中央図書館2階）

自分なりの道筋を作る

紙媒体が主流の情報源だったころは、情報の優劣をつけやすかったと思います。それは、学術雑誌などの権威付けが明確だったこと、そして情報の発信は限られていたことに起因します。情報を受信した学生は、いくつかの権威付けされた資料を読み、比較・検討することによって、それぞれの主張の中に発生した矛盾点や弱점에気付くことができました。そこから自分の意見を持つことも可能だったと思います。

今は、ありあまる情報を精査する能力がないままに扱おうとすれば、論点を見つける以前に、途方に暮れることになってしまうでしょう。そのような学習環境の下、どうすればいいのか。まずは基本的な情報のつかみ方を知ることです。その方法については、先生方が教えているはずですし、図書館が実施している「学術情報リテラシー科目」もその一環です。基本的な情報の探し方はそうした機会に学ぶことが可能です。しかし、最後は、試行錯誤して、自分なりの流儀というか、道筋を作り上げる以外にありません。



学術情報リテラシー科目
でのひとこま

喫茶店とグループ学習

学生時代は、同級生や先輩の口コミを参考に本を選ぶことが多かったように思います。今でもよく覚えているのは、「英文をスラスラ読むためには、1,000ページ以上の洋書を読まなければいけない」と先輩に言われたことです。そう言われて、さっそく三軒茶屋の進省堂という、坪内祐三さんのエッセイにも登場する古本屋さんに行って、『風とともに去りぬ』を買って読みました。ペーパーバック版で古本ですから安く、しかもちょうど1,000ページ前後だったからです。今から考えると、その先輩がそれを実行していたかどうかは疑問なのですが。

その当時、学生同士がそうした話をする場所は決まって喫茶店でした。ただ単にコーヒーを飲みに行くのではなく、それぞれが本を読んで、あるいは読んだフリをして、そこから得た知識について語り合ったものです。

また、資料を紹介してもらう以外にも、学生同士で議論することはとても勉強になりました。特に、先輩の話し方を聴きながら、相手に納得させるためにはどうしたらいいのか学ぶことができました。同級生がしっかり資料を読み、話をしているところを見て、触発された部分も大いにありました。議論をすることで、問題の解決方法が一つではないことを知るきっかけにもなりましたし、自分がよくわかっていない点のはっきりし、さらに、調査を深めるという良いサイクルも生まれました。

これは今の「グループ学習」に通じるのではないのでしょうか。思い返すと、当時の喫茶店は現在の「ラーニングcommons」に通じる場所だったと思います。先ほどもお話ししたとおり、資料を読み、しっかり理解するという作業は、最終的には一人でする孤独な作業だと思います。しかしそれだけでなく、先輩や同級生たちから資料に関する有効な情報を得られたことは、私自身にとって自分自身を鍛える重要な経験になったと思います。コミュニケーションも必要だということです。

今の学生の皆さんにもぜひそのような体験をしてもらいたい。そして、そのきっかけ・動機づけとなるような施設・設備を図書館内に設置することを目指しています。議論が白熱すれば、長時間そこに滞在するようになります。その時に、座り心地の良い椅子があれば、なお良い環境でしょう。そういった場を現在の学習環境に合わせて、ぜひ図書館が提供したいと考えているのです。

可能性を秘めた空間

しかし、なぜ図書館にそういった施設を作る必要があるのか疑問に思われる方もいると思います。図書館にはすでに多くのツールがあるからです。一つは、約220万冊の蔵書、そしてどんどん充実しているデータベースです。さらに、図書館には多くのスタッフが、皆さんのサポートをするためにスタンバイしています。図書館は多くの可能性を秘めた空間なのです。

中央大学図書館について

施設面については、初めて入館したときに、その明るさにとっても感動しました。図書館＝暗いというイメージを強く持っていたので、吹き抜けがあり、開放感のある中央大学の図書館はとても新鮮でした。すばらしい大学に就職できたと思いました。

また、資料の面についても豊富で、さらにレファレンスサービスが充実していることにも驚きました。この図書館があったからこそ、私のような者でも、一応人並みの研究ができたと心から思っています。

一方で他大学と比較したときに、開架資料が少ないことが残念で、閉架書庫には宝の山が眠っているのです。学部生でも、「卒論入庫」という形で入庫を許可していますので、ぜひ活用してもらえたらと思います。

最後に

あふれる情報を自由に駆使する。簡単なことではありません。「学問に王道なし」といわれるとおりなのです。自分で努力するしかありません。図書館は、そのような学生の皆さんの努力をサポートできる空間です。せいぜい、使い倒してください。

入館料：非会員 300 円、学割適用者 200 円
※会員は無料

開館時間：午前 10 時～午後 6 時

休館日：日曜、祝日、年末年始

サービス内容：

●資料の閲覧

非会員：10 冊以内

(11 冊以上は 10 冊につき 200 円、最大 1 日 50 冊まで)

会員：100 冊以内

閲覧受付時間：午前 10 時～午後 5 時 15 分

●資料の複写

モノクロ 1 枚 60 円 (学割 40 円)

フルカラー 1 枚 150 円

複写受付時間：午前 10 時～午後 5 時 30 分



大宅壮一文庫外観

住所：〒 156-0056 東京都世田谷区八幡山 3-10-20
TEL：03-3303-2000 URL：http://www.oya-bunko.or.jp/
交通アクセス：京王線八幡山駅下車 徒歩約 8 分

皆さんは『大宅壮一ノンフィクション賞』という賞を聞いたことがあるでしょうか？“ライターの登竜門”と言われる有名な賞ですが、これは「一億総白痴化」、「恐妻」などの名言・造語を数多く生み出し、社会評論、人物評論で名を馳せたマスコミ界の一大人物である大宅壮一氏にちなんで設立された賞です。この賞の元となった大宅氏は、生前より古書店を回り積極的に本（とりわけ雑誌）を収集し、その蔵書は個人ながら 20 万冊にも及びました。大宅氏の死後、「蔵書は一団体に所有されないで、マスコミ人が共有して利用できるものになりたい」という遺志に基づいて、誰もが利用できるように公開したのが、今回紹介する「雑誌」の専門図書館である大宅壮一文庫です。

大宅壮一文庫は、雑誌、特に一般大衆誌を中心に所蔵



大宅氏の旧書斎

をしている、国内では珍しい“一般雑誌の専門図書館”です。一般大衆誌とは、例えばファッション誌、娯楽誌、ゴシップ誌など幅広いものを指します。明治時代から現在まで 1 万種類 73 万冊所蔵していて、現在も年間およそ 1 万 3 千冊ずつ増加しているとのこと。創刊号も約 7 千タイトルあります。原則として廃棄はせず、所蔵しきれない分は埼玉県にある分館へ移して保存されています。

収集した雑誌は、独自の手法で分類され、雑誌記事がキーワードで引けるように整えられています。職員が記事一つ一つをタイトルだけでなく内容まで目を通し、最適なキーワードを付け、いつでも引けるようにしています。これは大宅氏が生前に残した言葉「本は読むものではなく、引くもの」という理念を具現化しています。このように索引化した情報をデータベース化したのが Web OYA-bunko (大宅壮一文庫雑誌記事索引検索 Web 版) で、本学でも利用することができます。

大宅壮一文庫の 1 階には端末機が設置されており、そちらを使って記事検索が行えます。読みたい記事の掲載誌のタイトルと発行日などが特定できたら、申込書に必要な事項を記入し、2 階カウンターへ提出します。書庫は閉架式となっているため、文庫の職員が代わりに出納し、希望の雑誌が提供されます。今回特別に見学させて頂いた書庫の中には、古くは明治期に発行された雑誌から、『週刊ポスト』や『プレジデント』、『an・an』の最新号まで、様々な雑誌が所蔵しと所蔵されており圧巻です。なお、記事の複写を希望する場合は、閲覧同様申込が必要となります。

雑誌は新聞よりも種類が豊富で情報が多く、様々な書き手がいることから沢山の意見を見ることができます。社会学や民俗学などの調査には、学術雑誌よりもこういった通俗的な雑誌を調査することで、当時の動向をよりリアルに伺い知ることができます。実際利用者はマスコミ関係者が多く、まさに過去の実情や風俗を知るための情報の宝庫と言えます。最近ではサブカルチャーの流行もあってか、学生の利用も目立つようです。

学術雑誌や図書は図書館が保存しますが、消費され消えてゆく大衆誌を保存していく機関は他にありません。国立国会図書館ですら手に入れるのが難しい資料でも、実際に手に取って見ることができるのが大宅壮一文庫の強みです。電子情報だけでは得られない、当時のナマの情報に触れることが出来る貴重な場所を、ぜひ皆さんも活用されてみてはいかがでしょうか。



2階資料閲覧室

新収資料紹介

教職員著作目録 2012.6 - 2012.11 配架図書一覧 ()は所属学部等

著者名	書名	出版社	配架場所	請求記号
阿部 道明 (法務)	著 国際取引法：理論と実務の架け橋	九州大学出版会	中央書庫 / 開架	329.8/A12
2010年成年後見法世界会議組織委員会 紺野 包子 新井 誠 (法)	編 成年後見法における自律と保護：成年後見法世界会議講演録 監修	日本評論社	中央書庫 / 開架	324.65/N79
ドナルド・キーン 新井 潤美 (法)	著 日本文学史 近代・現代篇 7 (中公文庫 [キ-3-24]) 訳	中央公論新社	中央小型 開架文庫	910.2/Ke18 中公文庫 / キ-3-24
樹 仙露 李 燮娘 (総)	著 動物からの死のメッセージ 訳	晃洋書房	中央書庫 / 開架	480.4/J87
蘇 童 飯塚 容 (文)	著 河・岸 (ExLibris) 訳	白水社	中央書庫 / 開架	923/So11
韓 東 飯塚 容 (文)	著 小陶 (シャオタオ) 一家の農村生活 (コレクション中国同時代小説 第3巻) 訳	勉誠出版	中央書庫 中国言語	923/Ko79
王安憶 飯塚 容 (文) 宮入 いずみ	著 富萍 (フーピン)：上海に生きる (コレクション中国同時代小説 第6巻) 訳	勉誠出版	中央書庫 中国言語	923/Ko79
石井 正敏 (文)	編 近代化する日本 (日本の対外関係 7)	吉川弘文館	中央書庫 / 開架	210.18/N77
石川 晃弘 (名)	著 斯洛伐克熱：人門與文化 (東吳大學社會學系中東歐教學研究中心叢書 2)	松慧有限公司	社会学	293.48/I76
三宅 弘人、大澤 恒夫 猪股 孝史 (法) ほか	編 民法法総論学修入門 執筆	日本評論社	中央書庫 / 開架	324/M176
上野 清貴 (商)	監修 簿記のススメ：人生を豊かにする知識	創成社	中央書庫 / 開架	336.91/U45
上野 清貴 (商)	著 現代会計の論理と展望：会計論理の探究方法	創成社	中央書庫 / 開架	336.9/U45
上野 清貴 (商)	著 財務会計の基礎 第3版	中央経済社	中央書庫 / 開架	336.9/U45
上野 清貴 (商)	著 連結会計の基礎 第2版	中央経済社	中央書庫 / 開架	336.92/U45
杉原 泰雄、樋口 陽一、森 英樹 植野 妙実子 (理) 内野 正幸 (法務) ほか	編 戦後法学と憲法：歴史・現状・展望：長谷川正安先生追悼論集 執筆	日本評論社	中央書庫 / 開架	320.4/Su34
石村 修、浦田 一郎、芹沢 斉 植野 妙実子 (理) ほか	編 時代を刻んだ憲法判例 著	尚学社	中央書庫 / 開架	323.14/I78
宇佐美 毅 (文)、千田 洋幸	編 村上春樹と一九九〇年代	おうふう	中央書庫 / 開架	910.26/Mu43/U92
宇佐美 毅 (文)	著 テレビドラマを学問する (125 ライブラリー 006)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	778.79/U92
廣瀬 肇 ほか 牛嶋 仁 (法) ほか	編 給付行政の諸問題：村上武則先生還暦記念 執筆	有信堂高文社	中央書庫 市ヶ谷法務	323.9/H72
椿 寿夫、中倉 寛樹 遠藤 研一 (法) ほか	編 多角的法律関係の研究 執筆	日本評論社	中央書庫 市ヶ谷法務	324.52/Ts14
大野 一道 (名)	著 春のはなびら	角川書店	中央書庫 / 開架	914.6/O67
大淵 博義 (商)	著 国税の常識 第14版 (知っておきたい)	税務経理協会	中央書庫 / 開架	345/O19
奥山 英司 (商) ほか	著 世界金融危機と欧米主要中央銀行：リアルタイム・データと公表文書による分析	晃洋書房	中央書庫 / 開架	338.3/J52
西村高等法務研究所 落合 誠一 (法務)	責任編集 会社法制見直しの視点 編者	商事法務	中央書庫 / 開架	325.2/N84
落合 誠一 (法務)	著 公司法概論 = The elements of corporate law	法律出版社	中央書庫	325.2/O15
高橋 作太郎 笠原 守 (法) ほか	編集代表 リーダーズ英和辞典 第3版 編集	研究社	参考 / 開架	D833/Ta33
M・C・ヌスバウム 神島 裕子 (商)	著 正義のフロンティア：障害者・外国人・動物という境界を越えて (サビエンティア 25) 訳	法政大学出版局	中央書庫 / 開架	311.1/N99
河合 忠彦 (戦略)	著 ダイナミック競争戦略論・入門：ポーター理論の7つの謎を解いて学ぶ	有斐閣	中央書庫 / 開架	336.1/Ka93
新人物往来社 木田 元 (名) ほか	編 日本の個性：「歴史」から「現在」を読み解くための9章	新人物往来社	中央書庫 / 開架	210.04/Sh63
イアン・ブレマー 北沢 格 (経)	著 [Gゼロ] 後の世界：主導国なき時代の勝者はだれか 訳	日本経済新聞出版社	開架	319/B72

著者名	書名	出版社	配架場所	請求記号
マルコ・ポーロ 月村 辰雄、久保田 勝一 (商)	著訳 マルコ・ポーロ東方見聞録	岩波書店	中央書庫 / 開架	292.09/P77
毛塚 勝利 (法)	著 個別的労働法講義要綱	信山社	中央書庫 / 開架	366.14/Ke67
小林 謙一 (文)	著 縄紋社会研究の新視点:炭素 14 年代測定の利用 普及版	六一書房	中央書庫 / 開架	210.02/Ko12
小林 道正 (経)	著 はじめての微分積分 (基礎からわかる数学 1)	朝倉書店	開架 埋開	413.3/Ko12 410.8/Ki59
小林 道正 (経)	著 はじめての線形代数 (基礎からわかる数学 2)	朝倉書店	開架 埋開	411.3/Ko12 410.8/Ki59
小林 道正 (経)	著 デタラメにひそむ確率法則:地震発生確率 87%の意味するもの (岩波科学ライブラリー 195)	岩波書店	中央書庫 開架	417.1/Ko12 408/195
小林 道正 (経)ほか	編 算数・数学つまずき事典	日本評論社	中央書庫 / 埋開	410.4/Su23
斎藤 孝 (文)	著 デジタルメディアの情報インデックスと知識地図の研究 (中央大学学術図書 81)	中央大学出版部	中央書庫 理工	401/Sa25 0075/Sa25
佐藤 元英 (文)	著 政戦略と戦争終結の決断 (明治百年史叢書 第 466 巻・御前会議と対外政略:「支那事変」処理から「大東亞戦争」終結まで 3)	原書房	中央書庫 / 開架	210.74/Sa85
椎橋 隆幸 (法)	編 プライマリー刑事訴訟法 第 4 版	不磨書房 信山社 (発売)	中央書庫 / 開架	327.6/Sh32
椎橋 隆幸 (法)ほか 長井 園 (法務)、安井 哲草 (法) 柳川 重規 (法)ほか	編・執筆 執筆 刑事訴訟法 (判例講義)	悠々社	中央書庫 / 開架	327.6/H67
島田 修一 (名)ほか	編著 人間発達地域づくり:人権を守り自治を築く社会教育	国土社	開架	379/Sh36
今村 橋夫、島村 法夫 (商) 岡本 正明 (法)、中村 亨 (商)ほか	監修・執筆 編集・執筆 ヘミングウェイ大事典	勉誠出版	参考 / 英文	M930.29/H52/144
平井 一雄、清水 元 (法務)	編著 債権法 (基本講座民法 2)	信山社	中央書庫 / 開架	324/Ki17
清水 元 (法務)	著 債権各論 1 (プログレッシブ民法)	成文堂	中央書庫 / 開架	324.5/Sh49
清水 元 (法務)ほか	編 財産法の新動向:平井一雄先生喜寿記念	信山社	中央書庫 市ヶ谷法務	324.2/Sh49
レオン・ブライスール 遠藤 ゆかり 杉崎 泰一郎 (文)	著訳 監修 シトー会 (「知の再発見」双書 155)	創元社	中央書庫 / 開架	198.2/P92
藤越 康祝、杉山 高一 (名)	編著 多変量モデルの選択 (シリーズ多変量データの統計科学 4)	朝倉書店	中央書庫 埋開	417.5/Sh88 417/F59
ポーラマルシェ 鈴木 康司 (名)	作 訳・解説 「新訳」フィガロの結婚:付「フィガロ三部作」について	大修館書店	中央書庫	952/B31
鈴木 俊幸 (文)	著 書籍流通史料論 序説	勉誠出版	中央書庫 / 開架	023.91/Su96
高橋 薫 (法)	著 「フランス」の誕生:十六世紀における心性のありかた	水声社	中央書庫 / 開架	235.05/Ta33
高橋 由明 (商) 早川 宏子 (法)ほか	編著・編訳 編訳 スポーツマネジメントとメガイベント:Jリーグサッカーとアジアのメガスポーツ・イベント	文眞堂	中央書庫 / 開架	780/Ta33
島 伸一 只木 誠 (法)ほか	編著 編著 たのしい刑法 1	弘文堂	開架 / 市ヶ谷法務	326/Sh35
田中 洋 (戦略)	編著 ブランド戦略・ケースブック:ブランドはなぜ成功し、失敗するのか	同文館出版	中央書庫 / 開架	675.2/Ta84
津野 義堂 (法)	著 法知の科学 XII	津野文庫 中央大学生協書籍部 (販売)	中央書庫 / 開架	322/Ts81
加川 幸雄 戸井 武司 (理)ほか	編著 共著 快音のための騒音・振動制御	丸善出版	埋開	501.24/Ka17
富田 俊基 (法)	著 国債の歴史:凝結在利率中の過去と未来 (阅读日本書系)	南京大学出版社	中央書庫	347.2/To58
永井 和之 (法)ほか	編 会社法学の省察	中央経済社	中央書庫 / 開架	325.2/N14
ジャンニジャック・ルソー 川出 良枝 窪塚 忠躬、永見 文雄 (文)	著 選訳 政治 (白水クラシックス・ルソー・コレクション)	白水社	中央書庫 / 開架	311/R76
高橋 和之 橋本 基弘 (法)ほか	編 執筆 新・判例ハンドブック憲法	日本評論社	中央書庫 / 開架	323.14/Ta33
姫田 光義 (名)	編 北・東北アジア地域交流史 (有斐閣アルマ Interest・世界に出会う各国 = 地域史)	有斐閣	中央書庫 / 開架	220/H59
平澤 敦 (商)ほか	編 はじめて学ぶ損害保険 (有斐閣ブックス [463])	有斐閣	中央書庫 / 開架	339.5/O84
升田 純 (法務)	著 判例にみる損害賠償額算定の実務 第 2 版	民事法研究会	中央書庫 / 開架	324.55/Ma66
升田 純 (法務)	著 風評損害・経済的損害の法理と実務 第 2 版	民事法研究会	中央書庫 / 開架	324.55/Ma66
升田 純 (法務)	編著 不動産取引における契約交渉と責任:契約締結上の過失責任の法理と実務	大成出版社	中央書庫 / 開架	676.9/Ma66
松尾 正人 (文)	編著 多摩の近世・近代史	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	213.6/Ma85
岡田 朋之、松田 美佐 (文)	編 ケータイ社会論 (有斐閣選書 [1676])	有斐閣	中央書庫 / 開架	361.5/O38
松丸 和夫 (経)ほか	著 地域循環型経済への挑戦 (労働総研ブックレット No.5)	本の泉社	中央書庫 / 開架	332.9/Ma81
丸山 秀平 (法務)	著 やさしい会社法 第 12 版	法学書院	中央書庫 / 開架	325.2/Ma59
丸山 秀平 (法務)	著 事例で学ぶ手形法・小切手法 第 3 版	法学書院	中央書庫 / 開架	325.6/Ma59
森信 茂樹 (法務)、河本 敬夫	著 マイナンバー:社会保障・税番号制度 -- 課題と展望 (KINZAI/リビュー叢書)	金融財政事情研究会 きんざい (販売)	中央書庫 / 開架	364/Mo59
矢内 一好 (商)	著 現代米国税務会計史 (中央大学学術図書 80)	中央大学出版部	中央書庫	345.253/Y54
山内 惟介 (法)	著 21 世紀国際私法の課題 (学術選書 77・国際私法)	信山社	中央書庫 / 開架	329.8/Y46
石田 眞 ほか 山田 省三 (法務)、川田 知子 (法) 米津 孝司 (法務)ほか	編集委員 執筆・協力 労働六法 2012	旬報社	開架	J366.14/I72
山田 昌弘 (文)、塚崎 公義	著 家族の衰退が招く未来:「将来の安心」と「経済成長」は取り戻せるか	東洋経済新報社	中央書庫 / 開架	361.4/Y19
山田 昌弘 (文)、開内 文乃	著 絶食系男子となてしこ姫:国際結婚の現在・過去・未来	東洋経済新報社	中央書庫 / 開架	367.4/Y19
全日本冠婚葬祭互助協会 山田 昌弘 (文)ほか	編 執筆 無縁社会から有縁社会へ	水曜社	中央書庫 / 開架	368/Z3
目黒 依子、矢澤 澄子、岡本 英雄 山田 昌弘 (文)ほか	編 著 揺らぐ男性のジェンダー意識:仕事・家族・介護	新曜社	中央書庫 / 開架	367/Me19
中道 仁美、小内 純子、大野 晃 吉澤 四郎 (名)	編著 執筆 スウェーデン北部の住民組織と地域再生	東信堂	中央書庫	318.9388/N35
劉 慶邦 渡辺 新一 (商)、立松 昇一	著 訳 神木:ある炭鉱のできごと (コレクション中国同時代小説 第 5 巻)	勉誠出版	中央書庫 中国言語	923/Ko79
方 方 渡辺 新一 (商)	著 訳 落日:とかく家族は (コレクション中国同時代小説 第 8 巻)	勉誠出版	中央書庫 中国言語	923/Ko79

* (法):法学部、(経):経済学部、(商):商学部、(文):文学部、(総):総合政策学部、(理):理工学部、(法務):法務研究科、(会計):国際会計研究科、(戦略):戦略経営研究科、(研):研究開発機構教授、(名):名誉教授
* 配架場所は2ヶ所まで掲載しています。

貴重書・準貴重書の利用について

貴重書、準貴重書の閲覧は館長の許可を要するため、事前の手続きが必要です。詳しくは中央図書館2階カウンターにお問い合わせください。
なお、大学院生は指導教員の推薦状が、学部学生は指導教員の同伴が必要となります。